株式会社ナナオ www.eizo.co.jp EIZO

フォトスタジオでも大活躍

フォトスタジオまえだ

静岡県田方郡函南町塚本 559-1
TEL 055-979-0237

写真 1

写真 2

第 2 回目はちょっと趣向を変えて「街の写真館の巻」である。街と表記すると大学前にある写真館を連想するが、今回紹介する「フォトスタジオまえだ」（http://www.studiomaeda.com/index.html）は「町の写真屋さん」と表現したほうが似合っている。ロケーションは新幹線三島駅から伊豆箱根鉄道駿豆線に乗り換えて 5 つ目の駅「伊豆仁田（いずにった）」から車で 7 分といったところで、箱根連山や伊豆の山々を望む環境抜群の田園地帯である。写真 1、2 を見ていただければお分かりいただけると思うが、ドライブ中に見掛ければ、ついついコーヒーでもと立ち寄りたくなるカフェやレストランのような洒落た写真館である。

大学の写真部仲間だったご夫妻

写真 3 は「フォトスタジオまえだ」の御主人である前田安之さん（左）と公私ともの相方である奥様の節子さん（右）である。大学は異なるものの（安之さんは明治大学で節子さんは立教大学）お二人ともにクラブ活動は写真部に属しており、横断的な全国組織で知り会われたということだ。「なぜ伊豆仁田なのか？」は安之さんの故郷が韮山町（現伊豆の国市）であり、大学卒業後、熱海の写真館で修行、縁あって隣町の函南に土地を求めることができて開業、以来二人で苦労してきたが、現在は、もう一人の強力な助っ人である長男の陽太さんを加え、3 人体制で仕事をこなしている（ちなみに陽太さんは町の消防団所属の現在花嫁募集中の好青年である）。町の写真館なので仕事内容は多岐にわたるが、学校アルバムや成人式、七五三などの記念撮影が主たる業務になっているのは通常の写真館と大差ない。ただし当初モニタもシネマディスプレイでデジカメ関係の仕事をスタートさせたのだが、デジタル化に真剣に取り組んだ結果、現在はナナオ製品が中心になっているところに只者ではないものを感じ取ることができる。コンピュータは Mac を主体としているが、色評価用に ColorEdge 系と作業用に FlexScan 系をデュアルモニタ環境で使用している。3 人作業しているだけでも 6 台強のモニタがフル活動しており、デジタル化がカメラマンに大きな変革を強いたのは衆知のこととは言え、その大きさを改めて痛感させられる。

色や調子は ColorEdge

写真 4 は安之さんの作業環境であるが、CG241W をメインに L767 も使われている。もちろん安之さんはアナログ的な Photo レタッチの経験があり良いものを観る目はあるわけだから、モニタの正確さが重要になるのだが CG241W なら申し分ない。写真 5 の陽太さんも CG19 と S2410W を使われている。

今回はこちらが取材に伺ったのだが、「このレタッチ方法で良いか？」と真顔で逆質問されてしまい、真面目に新聞印刷の例を挙げて、「一番重要なのは明るく、小ぎれいに」ということをサジェスションして、将来はどの印刷会社も印刷を安定させられれば「よりコントラストに」など、状況は大きく変わってくる旨を付け加えさせていただいた。写真館もがんばっているのだから印刷所も安定化には最大限注力しなくてはなるまい。

新聞と同じにしては失礼だが、「この料理は素材らしさを引き出している」よりも「とにかくうまい！」というのを優先すべきだろう。その先にあるもの（真の調子・色再現）を前田夫妻は分ってくださると確信したので、ついつい暴言を吐いてしまった。

スタジオもデザインが大事

スタジオの現場は写真 6 ～写真 9 にあるとおりだが、自然光を取り入れた明るいスタジオになっている。もともと「フォトスタジオまえだ」の売りは 4 × 5 のような大判カメラによる高品質なので、今でもスタジオには SINAR が鎮座しているが、これがあるだけでもお客様に与える信頼感は天と地ほどの開きがある。オーディオは安之さんの趣味であろうが、フォトスタジオと音楽はベストマッチであり、モダンジャズやクラッシックでライティングにも増した効果が得られる。

4 × 5 カメラは何とも言えない雰囲気を醸し出してはいるが、現像所を見つけるのも至難のわざとなっているのが現実である。写真館にとってアナログの技術をいかにデジタルに生かしていくかが生き残りのカギとなる。電塾風の表現を使えばレンズ前の仕事はこのスタジオで、レンズ後がモニタに向かってということになるので、モニタの性能は写真館にとっては死活問題なのだ。

スタジオのセンス以上にポイントとなるのがスタイリストで、このへんは節子さんの担当である。着物の着付けや小物の配置など写真の出来の大きな部分を占めている。同じく節子さんの役目がグラフィックデザイナーとしての役割で、学校アルバムなどは「フォトスタジオまえだ」でレイアウト済みのデータを印刷所に入稿している。2000 年に Quark Express でレイアウトを始め、2005 年に InDesign に切り替え、2007 年に完全 InDesign 原稿としての入稿体制を確立している。デザイナー的にはスペースを多く取ったデザインをしたいのだが、生徒さん側から見たら自分がたくさん載っていたほうが良いわけで、節子さんはこちらの要望を大事にしてレイアウトの工夫をしているとのことである。これだけでも「フォトスタジオまえだ」に発注しようという大きな動機付けになる。

また、お客様との接点ということで、写真 10 のしゃれたレセプションが大活躍している。撮影した写真を選ぶのもこのレセプションに置いてあるナナオの HD2452W を利用して、お客様自らが選ぶという方式を取っている。こんなところにも町の写真館として信頼を勝ち得ている「フォトスタジオまえだ」らしさが表れている。（郡司秀明）

写真 3

写真 4

写真 5

写真 6

写真 7

写真 8

写真 9

写真 10